



2012 年 10 月

02

東郷さんに

庭を奪われた



さん

一 鹿児島島の漱石さん

最初にお断りしておきますが、これは、作家夏目漱石が、日露戦争の英雄、東郷平八郎に庭を奪われたという話ではありません。ミスリーディングなタイトルで、夏目漱石と東郷平八郎との間に因縁があったのかと期待された方には申し訳ありませんが、ここに登場する「漱石」さんは、江戸時代の鹿児島島の人物です。その人がどういう人物だったのか、鹿児島でもあまり話題にされたことはありませんし、そもそもそういう人物がいたということさえ知られていません。これは、鹿児島に「漱石」さんが確かにいたのだということを明らかにする試みです。

しかし、「漱石」と自ら名乗る人物には、ある種の共通性が感じられます。漱石という名前は中国・三国時代の政治家、孫楚の逸話に由来します。孫楚が浪人時代、同郷の王済に世を捨てて隠遁生活がしたいと「枕石漱流（石に枕し流れに漱がん）」と言おうとして、つい「漱石枕流（石に漱いで流れに枕せん）」と言ってしまい、王済から「流れを枕に、石で口をすすぐのか」と言い返されると、「流れを枕にするとは、世間の俗事から耳を洗いたいからで、石で口をすすぐのは歯を磨くためだ」と強弁したという故事によっています。『晋書』や『蒙求』で知られる故事です。へそ曲がりや負け惜しみの例えになっていますが、どこか脱俗的なユーモアもあります。

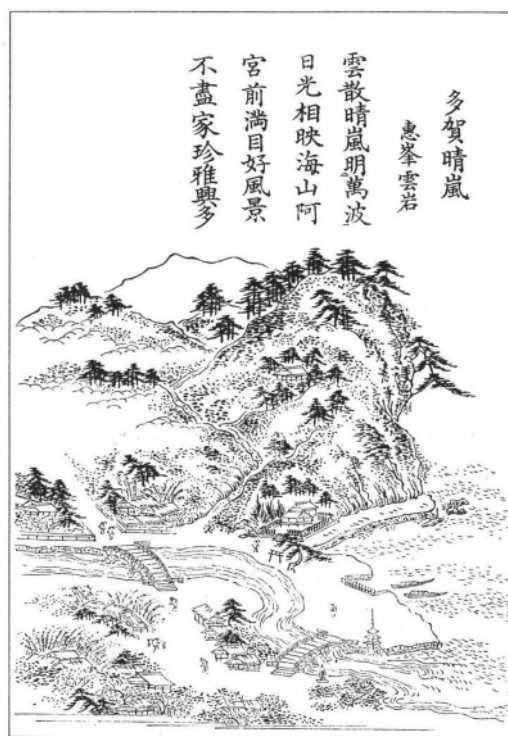
「漱石」という名前を持つものに共通するキャラクターがあるようです。それを典型的に示す文章を夏目漱石の『三四郎』から引用します。

「御互は憐れだなあ」と云ひ出した。「こんな顔をして、こんなに弱つてゐては、いくら日露戦争に勝つて、一等國になつても駄目ですね。尤も建物を見ても、庭園を見ても、いづれも顔相應の所だが、——あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでせう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。所が其富士山は天然自然に昔からあつたものなんだから仕方がない。我々が拵へたものぢやない」と云つ

『三国名所図絵』中の多賀山

江戸時代末期に鹿児島の名所旧跡を紹介した『三国名勝図絵』では、多賀山が、鹿児島の山水のなかで、まず最初に紹介されています。正徳・享保(1711～1736)のころにつくられた『鹿児島八景』で、多賀山は「多賀晴嵐」として、その海岸側の田ノ浦は「田浦夜雨」として、鹿児島を代表する風景として選ばれており、『寛藩名勝考』では「鹿児島八景」について「其画の如き木村静隠の手痕にして、観へきに堪へり」という記述があり、絵師・木村探元が描いたものが存在するらしいのですが、これは未見です。

鹿児島の漱石さんの文章『林岳記』では、「風病、風吟、丹楓、異風、風雷、風煙」など、風にまつわる語句が散りばめられています。「多賀晴嵐」を意識した技巧だと思われます。



て又によ／＼笑つてゐる。三四郎は白露戦争以後こんな人間に出逢ふとは思ひも寄らなかつた。どうも日本人ぢやない様な気がする。

「然し是からは日本も段々發展するでせう」と辯護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡びるね」と云つた。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐ擲ぐられる。わるくすると國賊取扱にされる。三四郎は頭の中の何處の隅にも斯う云ふ思想を入れる餘裕はない様な空氣の裡で生長した。だからことによると自分の年齢の若いのに乗じて、他を愚弄するのではなからうかとも考へた。男は例の如くにや／＼笑つてゐる。

世の中の行け行けどんどの風潮に対し、「亡びるね」とつぶやいてしまふ精神と共通するものが、今回紹介する鹿児島の漱石さんの文章にもあります。世の流れに棹ささず降りてしまふようなところ、「仕事やめて田舎で隠者暮らししたい」と思つてしまふようなところが、鹿児島の「漱石」さんにはあります。鹿児島は尚武の土地柄とされていますから、いさましい話には事欠かないのですが、一方で、夏目漱石の低徊趣味に通じる系譜も、実は連綿と続いていたと思われます。もっとも、そうした存在は自己アピールをせず、世から隠れることをモットーとしますから、もともと目立つことがなく、見つけにくい存在です。鹿児島の「漱石」さんのことを喧伝して書くことも、余計な御世話で、正しい態度なのだろうか、考えないではありません。

今まで鹿児島の「漱石」さんについて論じたものは、渡邊正著『薩摩の国学』(昭和六十一年、黙遙社)収録の「林岳記―鹿児島にも漱石がいた―」ぐらいしか存在せず、まったく忘れられた存在でした。9ページの「三 漱石の庭」以下での考察で、この漱石さんが何者かを明らかにする手がかりを示し、鹿児島の失われてしまった文化に、新たな光を投げかけてみたいと思います。

ところで、なぜ夏目漱石の文章で、白露戦争に言及した部分を引用したかというところ、ある種の因縁というか、鹿児島の「漱石さん」は、ほんとうに東郷さんに庭を奪われたからです。

というのも、鹿児島市の多賀山公園にある東郷平八郎墓と東郷銅像があるスペースは、何も無い場所に新たに建てられたものではなく、もともとそこには「漱石」という人物がつくりあげた庭園があつて、その庭園を上書きするようにしてつくられたものだったからです。



錦江湾を見おろし、桜島と相対する東郷平八郎銅像

二 東郷平八郎銅像と林岳記

多賀山は、鹿児島市市街地の北部に位置する小さな山で、現在は鹿児島市が管理する多賀山公園となっています。日露戦争の日本海海戦で知られる東郷平八郎の遺髪墓と銅像があり、そこからの展望は、形のよい桜島と対面し、鹿児島市市街地や、錦江湾を行き交う船を見おろし、天気がよく空気が澄んでいるときは遠く開聞岳まで見はるかすことができる、鹿児島市内有数の景勝の地です。『鹿児島市史』によれば、多賀山公園として開設されたのは、昭和四年（一九二九）のことです。

現在、公園内にある掲示板などでは、東郷平八郎元帥の事績のほかに、藤原純友から四代目にあたる長谷川永純が十一世紀に東福寺城を建てたとされることが、南北朝の時代、南北朝の肝属兼重が奮戦した古戦場であったこと、さらに南朝側の矢上高純の居城だった東福寺城を島津貞久が攻め落とし、島津氏が出水から現在の鹿児島市地域に進出したとき、最初の居城となり拠点となったのが、東福寺城という山城、すなわち多賀山だったということを知ることができます。

大正・明治期の多賀山についても、地元の人間としては気になる事績がありますので、それは「補遺2」大正・明治期の多賀山」に簡単にまとめておきました。

■東郷平八郎墓と東郷平八郎銅像

この多賀山の山城跡に、東郷平八郎の遺髪墓と銅像が置かれた経緯は、鹿児島市長だった勝目清の回顧録『勝目清回顧録』（南日本新聞社、昭和三十八年）に当事者の回想として記されています。東郷平八郎元帥が昭和九年（一九三四）五月三十日に八十八歳で亡くなったとき、国葬となり、遺体は東京の多摩墓地に葬られました。遺髪は、郷里の鹿児島と江田島の海軍兵学校、横須賀に置かれていた軍艦三笠の三カ所に分けることになりました。鹿児島市議会は五月三十一日に東郷元帥



◀東郷平八郎銅像がある築山と聖将之碑

▼聖将之碑と元帥東郷平八郎墓



の分骨を鹿児島に埋葬することを決議しました。

候補地は、岩崎谷、武岡、天保山、多賀山があげられ、鹿児島県と鹿児島市で協議し、多賀山と決定しました。鹿児島市の市有地八百九十坪だけでは狭いので隣接民有地を購入して建設。その配置では、西に西郷隆盛の墓、東に東郷平八郎の墓という意図もあったようです。

昭和九年七月十八日、第七高等学校造士館の運動場で斎場の儀を行い、そこから約一時間の行列で歩いて多賀山に到着。埋葬し墓標を建てました。納棺された遺髪は、そのとき助役だった勝目清が直接取り扱って墓におさめました。墓石が完成したのは昭和十年四月三十日です。

戦後、岡山市の竹用氏が管理していた東郷平八郎の銅像を鹿児島に引き取る話がもちあがり、鹿児島市と海軍かもめ会の協力で、多賀山の東郷元帥墓の隣に移設することが決まりました。日本海海戦から五十年を記念して、昭和三十一年（一九五六）五月二十七日に除幕式を挙行しました。

以上のような経緯で、多賀山に東郷平八郎の遺髪墓と銅像が置かれることになり、現在の多賀山公園の大まかな形ができました。

■『林岳記』を読む

東郷平八郎銅像が建つ場所の後ろに、装飾がなく端正なすがたの一つの石碑が残されています。『林岳記』と題されたその石碑には、一行三十字、三十三行、約一〇〇〇字ほどの漢文の文章が四面に刻まれています。その作者の名が「漱石」です。多賀山の、錦江湾を見下ろし桜島を望遠する場所に、約二百年前、詩人「漱石」は、ささやかながら桜島と錦江湾を借景とした庭園を築いたようです。今、その庭園は当時の姿を残していません。そして、その「漱石」が何者なのかも確定されてはいません。

現在は、その「漱石」の庭を上書きするように、東郷平八郎銅像がたち、東郷平八郎の碑や墓石のたつ場所となっているわけですが、東郷平八郎銅像の裏側奥にポツンと野ざらしの『林岳記』碑が残っています。周辺には、ほかに庭園を構成していたであろう石鉢やら石塔の断片やら、樹齢二百年近い雀榕（アコウ）の巨樹やらが、失われた庭の記憶を残しています。

『林岳記』の本文を書写したものには、『鹿児島市史Ⅲ』（昭和四十六年、鹿児島市）中の「鹿児



東郷平八郎銅像を頂に置く築山
その奥に『林岳記』の碑が隠れるように佇んでいます。

島の金石文」や、渡邊正『薩摩の国学』（昭和六十一年、黙遙社）、また、平田信芳が書写したものがありますが、遺漏や誤記と思われるものも少なくなく、今回新たに、それらを参考にしつつ、改めて、異同を確認し、本文を書写しました。その『林岳記』全文（漢文です）を写真と対照させたものを「補遺1」に掲載しています。まっさらな態度で原典にあたりたいという方は、先に「補遺1」からお読み下さい。

しかし、漢文だけではとっつきにくいと思われますから、まずは鹿児島の「漱石」さんの人となりを知るためにも、3ページほどあって少し長くなりますが、『林岳記』全文の試訳をお読みいただきたいと思います。

本来なら、素直に『林岳記』の書き下し文を掲載したほうが親切かとは思いますが、筆者はやまっ気のある性分なので、ここでは、中国語の日本語翻訳において画期的であった柴田天馬の方法にない、振り仮名・ルビを多用した方法で訳を試みました。柴田天馬（明治五年（一八七二年）〜昭和三十八年（一九六三））訳の『聊齋志異』は、今読んでも目を驚かす翻訳です。柴田天馬訳の、日本語の特性を活かした独特のルビ、振り仮名の使用法は、素人がうかつに手を出すには危険な代物ではありますが、柴田天馬は鹿児島生まれで郷土の先輩ですし、「神仙」が登場する話ということもあって、縁もないではありませんし、少なくとも、たたき台ぐらいにはなるかということ、天馬のへたくそな模倣をおこなう誘惑に抗しきれませんでした。どなたか折り目正しく軽快に、漱石の「現代文」化を試みてくだされば、うれしいです。

柴田天馬の父、柴田圭三は、奈良出身ですが、鹿児島藩の通訳や鹿児島造士館の教官を務めた人物で、その関係もあって、柴田天馬は鹿児島生まれです。ということ、異才・柴田天馬を出したということ、鹿児島はもうちょっと自慢してもいいのではないのでしょうか。二〇一二年に出た『聊齋志異』ちくま学芸文庫版では、訳者・柴田天馬先生の著作権継承者の方と、いまだ連絡が取れていない、とあり、それもまたさびしい話です。

林岳記

東福之山は、沿海に起ち、兀立「巖」「巖」ようにして櫻嶽と相對っている。乃甚高くはないが、その山は則美である。靈も有るのではなからうか。

子の世家はその上にあり、「漱石」とへそ曲がり自號っている。嘗て風病を煩い、蒙蔽になつて蹇劣つてきたので、絶學棄知て、それから意を林岳にだけ傾けた。人はみな「癖」と言つた。

寛政丁巳の春のことである。ひとりの老父が忽然にやつて来て、両手を組んで揖して言うのである。

「癖でよい、癖でよい。吾もまた得其所じや。もともと山というものは、天地の根にして邦國の鎮じや。疲勞を忘れ、紛擾を解きほぐす。風味を楽しむのも性情じや。汝もよく鳥と遊ぶじやろ。」

時は夜將明、殘燈景も微かになるころあいであつた。鳥鵲が舍を繞つて鳴いている。恍と覺めると寂然として無物。夢で神仙と過ごしたのだと知つた。そうと知つてからは、「癖」はさらにすすんで「癖」なつた。遂には、工人の林清をやとつて巨石を擧げ疊ねて、峻巖な幽谷原澤が山藹る狀に造らせた。鬼工を倣に、遠遊っている鳥が易ように、剪菜や伐柯にも惟不措。また、自ら奇石を敷き、徑曲に、異草を植え、甘蔗をかみしめるように、巖の間に毎日、新しい意を設けた。崔嵬層巒が雲と霓の上にあり、千仞幽谷は下のようすがかすんで見えない。これは都盧の輕趣ではない。孰がこの山に蹈みいり、孰がこの谷を渉ることができる。

そこに植えられた樹といえは、松、柏、梅、桃、山櫻、枸子、海榴、檜柏、黄楊、梔子、躑躅、丹楓、櫻欄である。そこに植えられた艸といえは、芳蘭、秋菊、白及、菖蒲、款冬、瓦松、白茅、蘆、萩である。郁郁紛紛て、香りは蜚い、衣を襲う。

怪な巖には窟があり、その窟の中に寶相を置く。磴の道を數百歩すすむと蜚い塔がある。塔のまわりには鐵樹が多く蓊鬱萎萎つて石に倚り、岸を覆っている。磴の道が盡きたところに平坦な地があつて、その側に茅と茨で結つたようなあずまやを建て、遊息の場所とした。その下には、



東郷平八郎銅像から見た
雪の日の桜島

とおくまであうみはてしなく、千里蒼波が茫茫ひろがり、天低く雲を浴びる櫻嶺が屹然と海中から立っていて、お盆の中におかれた石みたいだ。府城は海ぞいに建ち、民も十里の幅にすむ。其の半ばは舟船を維いで、南から北から一幅の掛け軸を織りなすようにして、この地を湊とする。だから都會となるのだ。城南の海は淤って灣を為している。灣頭は洲と為って、潮勢に随う。或いは隠れして或いは見えして、きよめられた。灑然ように斜めに出ている。松林が鬱と茂る洲の渚に臨んで建っているのは南林の利である。大隅の垂水、高隈、新城、福山が、嶽の左腋に環をなして列なり、海に沿って霞が駁に雲が蔚と數百里の間を綿連とつづいて南の圻まで行く。南のいちばん遠くに屹然として天に表れるのが海門峯である。近衛藤公が「薩摩がた波の上なるうづば島これや筑紫の富士といふらむ」と歌に咏んだ筑紫富士という峰はこれである。以上が、ここからのながめの大観である。

杪冬の雪の晨、三春の花の夕、心腸を霞の外に暢やかにして、營魄は凝った霜が日に曝されるようになる。陰つても晴れても景が更わり。節物に異風がある。空から群仙だって降りてくるだろう。俊良とも會えるというものではないか。獨り從容として自ら適し、縦意することは、遊賞知った玄覽から佳趣を得るのと変わりなく、神仙もまたその情素にさからえず、まして人ならばなおさらであろう。

偶のことである。客が有って、嚴然して、其癖を責めて言うのだ。

「吾子は微躬を宇内に存し、性命を邦君から保たれ、髪膚を父母から承けた恩がある。

層巒を蹈むも高いとせず、幽谷を渉るも翻って浅いとすべきだ。

吾子はよく分かっているのか、なにゆえに人が徳に報いるということを。

恭勤めて倦むことなく、螢雪で書を照らすのは、學に務めるためだ。

窮でも達でも介を持ち、昭でも冥でも節を易えないのは、天を敬うためだ。

諫路る荆と榛を闢き、英を延ばし俊を擧げ、進退で國を以て憂いをするのは、君に事えるためだ。

暑いときに扇や枕簟をそなえ、風雷のときも笠を護るのは、親に報いるためだ。

どうしてまた、知を棄て學を絶つなどと、うそぶいていられるのだ。

林岳にだけ耽るということは、愚の一如というもので、それを甚のか。

たしかに、後漢の陳蕃は、ひとりの賢士にしか榻を下せずに、ほかを賓として接待しなかった。斉

の詩人、謝朓の門になることを窺わずに、詩を賦することもできない。

雖然、石は餐とすることはできなし、樹は羹にすることも難しい。

落葉を綴って裳を制るのか。

青い苔を被り衾を易すのか。

風煙に飽きることはないだろうが、月色を看るに愈々寒くなるぞ。躬を安逸にして、林岳に思いを

馳せるだけで、いったい何になる。

凍餒の備えはどうするのか。」

遣責から移時して、予は笑って答えた。

「杜氏の癖でさえ人は非という。ましてや山林癖といったら。

噫呼、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむと『論語』でもいつているではないか。

それで山林を樂しみとしているのだ。

予は敢えて漱石という號を晉の孫楚の言い間違いを強弁した故事から取ってはいるが、謬で謬を傳

え、蒙に蒙をかさね、蔽に蔽をかさねようとするものではない。

然に、夢で神仙と遇ったとは、一つの「偉」だ。

きみのような君子から大論を聞くのは一つの「益」だ。

脚下に山岳があつて千里之外に江と海を觀るのは一つの「絶」だ。

蓋し、林岳という一つの癖からその三つを得るといふのも、是また一つの「奇」ではないか。

この四事を合わせて、一つの「玄」とする。

若夫、富貴が營營と世の利に奔走っているが、其の所勞を知らないで、疲勞を忘れ、紛擾を解

きほぐすにかぎる。風咏んで樂しむとするのは性情なのだ。」

享和癸亥春三月、漱石が自ら記を為して、石に書した。



◀『林岳記』正面 鹿兒島の反田土（たんたど）石で作られています。
幅 39cm、奥行 27.5cm、高さ 114cm
の小ぶりな石碑です。一行三十字で三十三行、石碑の四面に、内容と違って奇に走ることなく誠実な字で刻まれています。

三 漱石の庭

■ 詩人・向井友章

『鹿兒島市史Ⅲ』（昭和四十六年）の「鹿兒島の金石文」に集録されている碑文では、山本正誼や五代秀堯が撰したもの、折り目正しい魅力を感じるものの、基本的に「りっぱなもの」ばかりで、正直言って、改めて漢文を読み解こうと駆り立てるような面白味に欠けています。脱俗趣味を感じ

られる碑文は少なく、そういう意味でも『林岳記』は、鹿兒島の金石文のなかでも異色の存在のひとつです。試訳から「幕末の志士」「薩摩隼人」といった鹿兒島人像とは、違ったキャラクターの姿が浮かびあがってこないでしょうか。

『林岳記』の概要は、「寛政丁巳之春」＝寛政九年（一七九七）に漱石さんが夢で神仙と会ったことから、造園にのめりこみ、その顛末を「享和三年春癸亥」＝享和三年（一八〇三）に漱石さんが自ら記して石に刻んだということになります。

この約二百年前の「漱石」は何者かという、まだ確定されてはいません。漱石の林岳記についてのほぼ唯一の論考と言っている「林岳記―鹿兒島にも漱石がいた―」（『薩摩の国学』収録、昭和六十一年、黙遙社）の渡邊正は、向井友章という人物ではないかと推測しています。

向井友章は、名は甫、字は達夫、通称源五左衛門、賀山また滄浪と号した鹿兒島の漢詩人です。賀山と号したように、一八〇〇年前後、多賀山周辺の清水町に住んでいたようです。文化九年（一八一二）壬申十月、五十四歳で亡くなっています。



◀『林岳記』碑が置かれた位置から
東郷平八郎銅像をのぞむ

▼『林岳記』左面



向井友章は江戸の昌平黌に七年間学び、帰鹿後は島津重豪の設立する吉野の薬草園にかかわったり奄美大島に派遣されたりしたようです。官としての目立った記録はありません。病気で官職をあつさり辞め、私塾というかたちで漢学を教えていたようです。

『楚辞』の何事も流れにままにという滄浪歌から取ったと思われる号が示すように、中国古典に傾倒した、まったくの詩文の人です。島津重豪の治世下、どこか駘蕩とした時代の詩人です。

渡邊正は、『林岳記』だけに名前が残る謎の人物「漱石」が向井友章ではないかと推測した理由として、①友章が多賀山（東福の山）麓に住んでいたこと。②林岳記の年代と友章の生存時が合うこと。③林岳記には植物のことが詳しいが、友章は薬園の奉行をつとめたことがある。④林岳記には漱石は「風病」を患って馬鹿になり、学問を捨てたとある。

「風病」は普通「氣ちがい」「中風」のことであるが、そんな人物に林岳記のような立派な文章が書けるかどうか甚だ疑問であって、これはフィクションくさい。当時「風鈴病」とよばれた、気の向かないことには無愛想で、人の相手にならない極端な「天気屋」の譬喩ではないか、としています。以上の四つから「漱石」が向井友章ではないかと推論する一方で、「研究の結果、友章が漱石だといった私の推論がたとい噴飯物になったとしても、私は一向かまわないのである」として、確信をもって「友章＝漱石」を唱えているわけではないこともうかがえます。

確かに、これらの論拠を含め『林岳記』本文の内容とも合致するような経歴ですので、向井友章は「漱石」の候補者として申し分ありません。

ただし、いちばん疑問に思われる問題点は、城東一の風景で知られ、鹿児島八景の一つにも数えられる、島津家の鹿児島市域進出の最初の拠点となった古城である多賀山・東福寺城に庭をつくるということは、街いちばんの名所に庭をつくるようなもので、向井友章が庭をつくる場所としては、あまりに場所が良すぎるくらいがあるということです。

■ さつまの漢文脈

新薩藩叢書に向井の文章と詩を集めた『滄浪遺稿』と『滄浪詩集』が収録されています。ただ『滄浪遺稿』『滄浪詩集』には、『林岳記』や漱石に関係するような記述は全くありません。『滄浪遺稿』と『滄浪詩集』を編集したのは向井の弟子の新納時升です。新納時升は清水町にあった本立寺の東隣に住んでいたようなので、多賀山のご近所です。新納時升は、調所広郷の政策に反対したり、お由羅騒動にも連座して徳之島遠島になったりしますが、後に藩校造士館助教となった気骨ある人物です。『滄浪遺稿』と『滄浪詩集』はすべて漢文で書かれています。

余談になるかもしれませんが、江戸時代の武士たちが自分の感情を表現するツールとして、漢詩を選択したという光景は、現在の目から見ると、やはり変な感じを否めません。

武士階層をはじめとする日本人男子は、一九〇〇年頃まで、儒教をはじめとする中国の思想を自らの行動原理の骨格とし、中国の詩形式で自らの感情を表現してきました。翻訳でなく、漢文で読み、漢文で書き、そこに返り点や書き下し文という日本独自の工夫も加わっているのですが、あくまで漢文で思考する人たちでした。ただ中国語で会話することはそれほど求められせん。その漢文は、基本的に日本人と日本人との間で使われる中国語だからです。ひとつ考えられるのは、封建制社会では、各藩の言語的独立性が強く、薩摩の人間と江戸の人間がそれぞれのお国言葉で会話するより、漢文・漢詩を使った方が共通の理解が得られやすいという面もあったのかもしれない。

国語は日本語だという近代的思想が当たり前だと思っている身からすると、日本人が日本人に気持ちを伝えるために漢文・漢詩をつくるという光景はやはり異様なのですが、現代でも多国籍な活動をする企業では、社内言語が英語になるなど、風向きはまた変わっていくのかも知れません。それでも、これから英語が支配的になっていくとしても、日本人が日本人に対して自分の感情を表現するために英語で詩を書くという光景は、想像しにくいことに変わりありません。それに対して、例えば、武士の鑑ともいべき存在の西郷隆盛が自分の感情を吐露できたツールが、やまとことばの和歌ではなく、漢詩であったということは、武士という存在を知るためには忘れてはならない前提になります。一九〇〇年以前の日本を読み取るには、ある階層の日本人にとって漢文脈が骨の髄までしみこんでいたことを忘れてはなりません。

とはいえ、『滄浪遺稿』と『滄浪詩集』をはじめとする、近代以前の日本人の漢文テキストは、日本人が日本語を読み書きするという近代環境では、難物になってしまっています。先人の貴重な知恵のテキストでありながら、漢文であるということだけで気軽にアクセスしにくくなっています。もちろん、中国古代にあこがれて、文章は秦・漢を理想とし、詩は唐に学ぶのていの、模倣的なテキストなら、もはや無用の長物です。そういうものならば、中国の古典を読んだ方が、はるかに有効な時間の使い方になります。近代以前の日本人の漢文の、現代に再利用可能な面を考えるとしたら、例えば、簡単などころでは日本の地名など固有名詞の記載があれば、地域の歴史的描写表現を豊かにするという点で、まだ取っ掛かりになるのかもしれない。

向井友章の文章では、自分の体験を記述したものが、やはり面白く読めます。鹿児島県北部の矢筈岳やはすだけに登り、そこからの眺めを描写した「登箭筈嶽記」、栗野で見つけた石炭の話「炭化石記」、家の床下に狸があらわれ、家人がそれを捕まえて煮て食べた話「記家人獲狸事」など、こうしたものを、もっとたくさん残してくれば、日本製漢文であっても可能性が広がったのではないかと思います。

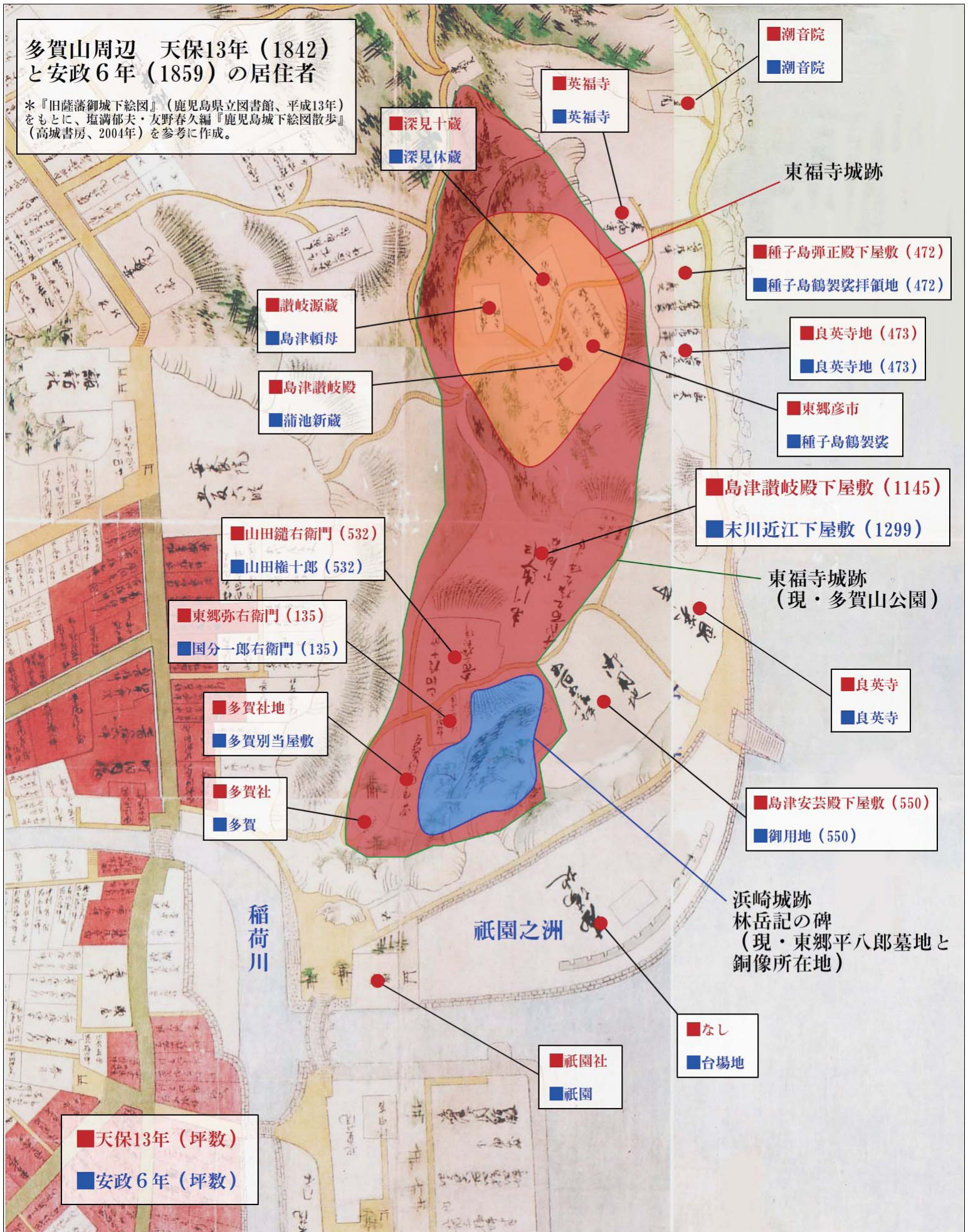
向井の文章や詩に使われた鹿児島県の地名には、小琉球（奄美のこと）・瓊浦・重富・垂水・濱平・崎陽・硫黄谷・伊水・中山（琉球のこと）・霧岳温泉・櫻峰・西橋・鹿屋・根占・米津（「米津八景」を詠っています）・琉球・山川・田布施・金峰山・冷水・箭筈岳・露温泉・龍郷・鬼界・覺照山・錦鏡池・芳野・垂城・本府・谷山・龍門水・加世田・穎娃・屋久島・鶴丸山・栗野などがあり、地域性という観点からの読み直しが可能かも知れません。

また、家や場所の名前に、国香館・嘯嗽亭・考槃亭・緑陰亭・滄浪亭・梅山新館・臨海亭・餐霞亭・明霞園・松月亭・觀魚亭・寵光亭・桃源亭・觀潮樓・仙巖・鶴江樓・嘯風樓・國香園・種玉亭・栖鶴亭・清風館などがあり、そうした名前の家や店のある街のすがたを思い浮かべると、確かに詩趣はあります。

向井の文章や詩では、人の名前の表し方も中国風に徹底していて、例えば米良則文子経なら「米子経」、新納時升伯剛なら「新伯剛」と中国風に三文字で表すなど、呆れるくらいの徹底ぶりです。貴公子をあらわす「公子」たちの存在も注目です。向井の文章や詩に登場するのは、都之城君・宮城公子・尚綱公子・豫（予）章公子・南林照公・興国鱗公・栢梁公子・奉謝公子・大邦公子・錦水

多賀山周辺 天保13年（1842） と安政6年（1859）の居住者

※『旧薩藩御城下絵図』（鹿児島県立図書館、平成13年）
をもとに、塩満郁夫・友野春久編『鹿児島城下絵図散歩』
（高城書房、2004年）を参考に作成。



公子・重城公子らで、これらはいずれも島津家の人々かと思われます。

豫章公子と栢梁公子

向井友章の詩に登場する場所と人物の組み合わせで、興味深い組み合わせがあります。その詩の題をいくつかあげてみます。

「春日同山口町田二助教遊東福別荘」

「東福城席上示上客鶴鳴」

「初春聞豫章公子信宿東福別荘」

「陪栢梁公子遊東福山」

「陪栢梁君遊東福山時鶴鳴亦從」

多賀山の「東福別荘」に「豫章公子」と「栢梁公子」が登場します。

ここで、時代をすこし下って、『旧薩藩御城下絵図』（鹿児島県立図書館、平成十三年）をもとに塩満郁夫・友野春久が編集した『鹿児島城下絵図散歩』（高城書房、二〇〇四年）を参考にして、天保十三年（一八四二）と安政六年（一八五九）の多賀山周辺の居住者を見てみたいと思います。13ページの地図で  でマーキングした部分が漱石の庭園で、現在、東郷平八郎墓地や銅像所在地にあたるかと思っています。

天保十三年（一八四二）でいえば、漱石の庭園の東側の山の下に島津安芸殿下屋敷があり、北側に島津讃岐殿下屋敷があります。ここでの島津安芸殿は今和泉島津家の十代目当主、島津忠剛ただたけ。篤姫の実のお父さんです。そして、島津讃岐殿は、垂水島津家十三代目当主、島津貴典たかのりです。垂水島津家の下屋敷が『林岳記』の碑がある場所に接しているということは、向井とはまた別の詩人の名を「漱石」と結びつけることになる非常に重要な事実になります。

余談になりますが、島津讃岐殿下屋敷とその隣の良英寺のあたりには、一九六〇年代まで鹿児島県知事の官舎がありました。ながらく放置されたあと、公売に出され、購入者が整地しようとしたところ百二十基を超える墓石や遺骨が出てきて問題になったことがあります。現在石橋公園になっ



かつて庭園を構成していたものの断片

ている祇園之洲には、西南戦争時の官軍の墓地があって、一三〇〇基を超える墓が並んでいたといいますが、現在は「西南の役官軍戦没者慰霊塔」（昭和五十二年建立）に合祀されています。

話を「豫章公子」と「栢梁公子」に戻すと、二人とも垂水島津家の人物です。豫章公子は、垂水島津家第十代、島津貴澄^{たかすみ}で、元文三年（一七三八）に生まれ、文化四年（一八〇七）、垂水で亡くなっています。豫章は楠の木の別称で、雅号です。栢梁公子は垂水島津家第十一代、島津貴品^{たかしな}です。宝暦七年（一七五七）に生まれ、文化十三年（一八一六）になくなっています。栢梁は、漢の武帝が柏の木でつくった御殿のことで、雅号です。13ページの地図で安政六年（一八五九）に、天保十三年の島津讃岐殿と同じ場所に下屋敷がある末川近江は、垂水島津家の分家、末川家の当主で、薩摩藩の家老をつとめた垂水島津家ゆかりの人物です。

垂水島津家は、島津一門四家のひとつで、鹿児島島の対岸、大隅半島の垂水で一万八千石を治めていました。島津家当主の子が養子に入る例が多く、第九代島津貴儔^{たかとも}は、藩主島津吉貴の第二子、第十代島津貴澄^{たかすみ}は藩主島津吉貴の第五子です。

島津貴澄^{たかすみ}は、鹿児島で、安永二年（一七七三）島津重豪が藩校の造士館を開いたのに続き、安永五年（一七七六年）、垂水に邑校・文行館を設立し、藩内外を問わず優秀な学者をまねいて文教政策を進めました。向井友章もそのひとりです。

貴澄の治世の間、桜島で安永の大噴火が起こり、その対策には苦心したようですが、貴澄の治世の垂水では、漢詩と和歌のある種の文藝ルネサンスが起こっています。貴澄は、ほんとうに詩文を愛した人物で、寛政十二年（一八〇〇）にまとめられた詩集『廢簞詩稿^{はいらんしこう}』三巻を残しています。これは新薩藩叢書に収録されています。貴澄の家臣たちも詩を好くし、文化十年（一八一三）それをまとめた『垂邑詩集^{すいゆうししゅう}』三巻も編まれています。

また、垂水島津家九代島津貴儔^{たかとも}の庶子、定救（周山）は分家して、末川家を名乗ることになるのですが、周山は和歌を愛し、文化九年（一八一二）周山の編集で、垂水の古今の和歌を集めた『浪の下草』（一一五〇首を収録）がまとめられます。収録作者数は八十二名（うち女性十一名）を数えます。続編もつくられ、天保六年（一八三五）、垂水島津家老の伊集院兼愷が編んだ『浪の藻屑』には二〇〇〇首を収録しています。



鹿児島市指定の保存樹アコウ
鹿児島市の推定では樹齢180年とされています。アコウの巨樹の根は石段に絡みついています。この樹の記憶は、もしかしたら漱石の時代まで及んでいるのかも知れません。

ようです。

島津貴澄^{たかすみ}が垂水から鹿児島にきたとき、多賀山の「東福山別業」で過ごしたことに間違いはない

「東福山別業和故人韻」

「東福山別業迎鶴山公子及諸君得侵韻」

「秋日東福山別業迎尊駕見賜玉章賦此奉謝」

「春日東福山別業迎鶴山公子」

島津貴澄^{たかすみ}の『廢麗詩稿』に収められた詩の題にも、多賀山の「東福山別業」が登場します。

『垂水市資料集 六』（垂水市教育委員会、昭和六十年）に収録された「垂水領主島津家家譜」でも、島津貴澄^{たかすみ}の代の記事として、「東福山」の名が何度か出てきます。

天明三年（一七八三）癸卯三月廿七日、稲荷、春日、八幡三社を東福ヶ城に建立する。導師井上左膳。

寛政十一年（一七九九）己未八月廿七日、齋宣公、雄五郎主、東福城別荘に臨み、献賜あり。

寛政十一年（一七九九）九月朔日、千萬夫人、東福城に臨み、献賜あり。

家譜中に登場する「齋宣公」は薩摩藩九代当主島津齋宣。「雄五郎主」は、島津重豪の三男、島津忠厚（今和泉島津家第八代当主）。「千萬夫人」は島津重豪の側室。藩主島津齋宣の母で京都のお公家さん堤家の出身です。つまり、島津貴澄^{たかすみ}は、多賀山の「東福城別荘」に、藩主やその母を招いているわけです。そして、「漱石」の正体を知る上で重要なヒントになる記述が家譜中にありました。

享和三年（一八〇三）癸亥十二月朔日、老を告げ、家統を貴品に譲る。

これは、貴澄が隠居し、貴品に家督を譲ったことをあらわしています。

漱石が『林岳記』を書き上げたのは、「享和三年春癸亥」＝享和三年（一八〇三）でした。貴澄の隠居の年と一致します。『林岳記』は、鹿児島県の東福山上に「別荘」または「別業」を構える、一縉紳しんしんにして一詩人、島津貴澄が引退の記念に心をこめて書き上げた文章だと考えるのが妥当ではないでしょうか。鹿児島県を代表する景勝の地に自分の庭園を開いたとしても、向井友章と違い、島津貴澄であれば、そのことに疑問がおきないということも重要な根拠になります。

『林岳記』は、一八〇三年の鹿児島県を代表する文藝作品として、もっと称揚されるべき小品ですが、その、どちらかというとのんきな隠棲礼賛は、十九世紀薩摩の政治的実行の時代の波にのみこまれて見失われてしまいそうです。もうすぐそこに、文化五年（一八〇八）の「近思録崩れ」という大規模な島津家のお家騒動が近づいています。

東郷平八郎墓を建て、東郷平八郎銅像を設置したときには、漱石の庭は、すでに廃園だったかと思いますが、そこは一縉紳しんしんが工夫を凝らした庭園で、藩主をふくめ、さまざまな人々が、多賀山からの眺望を楽しんでいたのだということも歴史の記憶にとどめておく必要があります。

詩人がつくりあげた庭が、十九世紀薩摩の行動主義の精華のような存在である、東郷元帥に奪われるようなかたちになったのは、しかたがないことかも知れません。しかし、東郷元帥がりっぱな人物であればこそ、その場所を守る人たちは、最初にその庭をつくった先人への礼儀を欠かさないようにするということも、武人としての正しい態度かと思っています。

『林岳記』に列挙された松、柏、梅、桃、山櫻、枸子くこ、海榴ざくろ、檜柏びやくしん、黄楊わうやう、梔子くわなし、躑躅つっじ、丹楓、櫻欄しゅらんなどの木々や、そこに植えられた芳蘭、秋菊、白及しらん、菖蒲、款冬くわんとう、瓦松がしやう、白茅はくまう、蘆あし、萩などの草花を欠かさないということだけでも、自慢の庭を失った漱石さんへの、せめてもの慰めになるのではないのでしょうか。

「補遺1」「林岳記」の写真と碑文書きおこし

「林岳記」の本文を書写したものには、『鹿児島市史Ⅲ』（昭和四十六年、鹿児島市）や渡邊正『薩摩の国学』（昭和六十一年、黙遙社）、また、平田信芳が書写したものがあるが、それらを参考にしつつ、改めて、異同を確認し、本文を書き写した。

使用した写真は二〇〇六年に撮影したものである。厳密に計画された撮影ではなかったので、写真の文字の縮尺は統一されていない。

異体字については、デジタル環境への対応を考えて、一部を除き、外字エディタなどで作成することをしなかった。

例外は、2行目「」で囲んだ「**截**」「**辟**」である。この熟語は「サツガツ」と読み、「そぎとったように高く険しいさま」を表すが、現行デジタル文字のJISやユニコード環境では外字扱いになる。パソコンなどでコピー＆ペーストしても文字としては表示されないので注意されたい。

青字は、異体字・旧字などで、JISやユニコード環境の文字コードで使われないものを、現行のデジタル環境で使用可能な文字に書き換えたものである。

赤字は、石の摩滅などで読みにくいため、別字の可能性もあるものである。



林岳記



2行目

東福之山沿海起



兀立「巖」「巖」與櫻嶽



相對乃雖不甚高



其山則美矣宜若有靈



3行目

然予世家其上自



號曰漱石嘗患風



病既而蒙蔽蹇劣



絕學棄知常傾意于林



4行目

岳人以爲癖寬政



丁巳之春一老父



忽然來揖予言曰



癖乎癖乎吾亦得其所



5行目

也哉夫山也者天



地之根而邦國之



鎮也忘疲勞解紛



擾風咏以樂性情汝能



6行目

遊鳥時夜將明殘



燈景微鳥鵲繞舍



鳴恍尔而覺寂然



無物乃知夢與神仙過



7行目

癖益為痼遂使工



人林清者舉巨石



以疊峻巖幽谷原



澤山藹之狀倣鬼工以



8行目

易遠遊鳥剪菜伐



柯亦惟不措又自



敷竒石於徑曲植



異草于巖間日設新意



9行目

以擬食甘蔗爾崔



嵬層巒上出雲霓



千仞幽谷下臨無



地乃非能都盧之輕趣



10行目

孰能蹈之孰能涉



之乎其樹則松柏



梅桃山櫻枸子海



榴檜柏黃楊卮子躑躅



左面

11行目

丹楓櫻欄其艸則芳蘭秋



菊白及菖蒲款冬瓦松白



茅蘆荻郁郁紛紛蜚香襲



12行目

衣恠巖帶窟窟中置寶相



磴道數百步而有蜚塔塔



邊多鐵樹蓊鬱萋萋倚石



13行目

覆岸磴盡而地平坦結茅



茨于其側以為遊息之所



目下千里蒼波茫茫天低



14行目

雲浴櫻嶽屹然立海中恰



似盆中之石 府城臨海



建居民十里幅其半復維



15行目

舟船如織自南自北一幅



湊此地故為都會耳城南



海淤而為灣灣頭為洲隨



16行目

潮勢或隱或見灑然而斜



出松林鬱茂而臨洲渚者



為南林刹垂水高隈新城



17行目

福山
環列嶽之左腋而沿



海行霞駁雲蔚數百里間



綿連而南圻南益遠屹然



背面

18行目

于天表者曰海門



峯其峰即近衛藤



公所歌咏筑紫富



土云者是其大觀也杪



19行目

冬雪晨三春花夕



暢心腸於霞外曝



營魄於凝霜陰晴



更景節物異風可降群



20行目

仙可會俊良也獨



從容自適縱意所



如及至得遊賞玄



覽之佳趣乃神亦不可



21行目

側其情素而況於



人乎偶有客嚴然



而責其癖曰吾子



存微躬宇內保性命



22行目

邦君承髮膚父母



恩蹈履巒不為高



涉幽谷翻可淺吾



子知能所以報德否乎



23行目

恭勤不倦螢雪以



照書者所以務學



也窮達持介昭冥



不易節者所以敬天也



24行目

關諫路之荊榛延



英學俊進退以國



為憂者所以事君



也暑扇枕簟風雷護瑩



25行目

者所以報親也何



為棄知絕學林岳



是耽取愚一如是



其甚乎陳蕃不下榻則



26行目

不為賓儲不窺謝



眇之門則何賦詩



雖然石不可以為



餐樹難以為羹綴落葉



27行目

制裳乎被青苔易



衾乎風煙不可飽



月色看愈寒置躬



于安逸馳思于林岳何



右面

28行目

以乎當凍餒之備耶



遣責移時予笑曰杜



氏之癖人尚非之



況山林癖耶噫呼



29行目

所謂知者樂水仁者



樂山若其於是樂則



予豈敢雖取號孫



楚以謬傳謬蒙之



30行目

亦蒙蔽之又蔽者也



然夢與神仙遇一偉



也聞君子之大論



一益也脚下山岳



31行目

觀江海於千里之外



一絕也蓋以一癖得



夫其三者是亦一



奇也合之為四事



32行目

一玄焉若夫營營富



貴奔走世利不知其



所勞不如忘疲勞



解紛擾風咏以樂



33行目

性情也享和癸亥春



三月漱石自為記以



書石爾



「補遺2」 大正・明治期の多賀山

■まぼろしの「田ノ浦公園」

鹿児島市によって昭和四年（一九二九）「多賀山公園」となる前に、大正・明治期の多賀山にどんな来歴があったのか、振り返っておきたいと思います。

大正十一年（一九二二）に大阪の駿々堂旅行案内部が発行した『鹿児島市街地図』や昭和八年（一九三三）熊本市の土橋兼良が発行した『實測番地入最新版鹿児島地圖』などでは、多賀山の位置に「田ノ浦公園」とあります。明治四十年（一九〇七）、加藤雄吉・坂田長愛の編集で天文館通の篠原書肆から出された『鹿児島縣案内』に「田之浦公園」の記述があります。

本園は公園と稱すれども、永吉といふ一私人の所有を解放したるものにて、永吉遊樂園と稱す、市の東北海邊の高所東福寺城の趾にて、陶器製造所の側より上る處なり、前面には錦江の碧水を堪へ、灣内に入出する大小の船舶は悉く集めて一眸の下にあり、近くは櫻島岳雲表に秀で、天然の築山をなし、遠くは高隈開門等の諸山繞り聳ち、恰も一湖水の觀あり、その中を來往する數多の船舶は一々手に採る如く見え、市街の過半も亦指顧の間に在り。またその西なる多賀神社の在る所も非常の好景にて、本園に譲らず。

また、明治四十三年（一九一〇）鹿児島市の吉田書房から出た勝野時太郎編『鹿児島市案内記』に「田之浦公園一名錦江園と呼ぶ、磯街道東福寺城趾にあり」とあり、大正十一年（一九二二）鹿児島市の現代社が出した堅山春村『鹿児島案内記』にも「田の浦遊園（城北清水町）」の記述があります。



「島津氏居城東福寺城跡」に残る石台 地元では「キツネ神社」と呼ばれていました。かつて「稻荷神社」が祀られていたのだと思われます。そこに当時をしのぶ石片がいくつか残されています。上部を失った石の台には、

「明治二十七八年日清戦役ノ際清國山東省威海衛灣内ニ於テ我カ水雷艇ノ撃沈シタル敵の旗艦定遠号ノ砲弾也



清國威海衛占領軍陸海軍御用達東福ヶ城地祖開墾

所有者 永吉柳右衛門 國治

明治三十一年八月起工」

と刻まれています。永吉柳右衛門 國治という人物が、日清戦争で陸海軍と商いして得た財をもって「遊園」を開いたのだと知れます。この石台の上には日清戦争の戦利品である敵艦の砲弾が置かれていたようです。今はどこに行ったのでしょうか。

鹿兒島驛より磯に通ずる國道筋の左側、磯に續く連山の中腹にある。眼下に錦江の水漾々として盪水を堪へ白帆ゆるやかに眠るところに亦城東一の景勝たるを失わぬ。

此地は東福寺城趾にして歴應四年四月、島津家第六代氏久公大隅肝付の一族を平げ其子元公父の志を繼ぎ、近く清水城を築きて、之に轉じた。其中腹には文久三年薩英戦争當時の東福ヶ城臺場の残礎がある。(現今永吉氏私有、此附近に知事官邸、慶田陶器製造所がある)

また、大正四年(一九一五)日本警察新聞社から出された東禾鳥『鹿兒島自慢』の「東福寺城址」に、

祇園之洲の北、多賀山の連峰中にあり、江山の勝、遊子をして、轉た羽化登仙の思あらしむ。傳へ言ふ、亂臣尊氏、天下を横行するや、名分混沌、西南諸侯の去就を誤るもの比々皆然らざるなし、肝付氏の一族、唯ひ大義を唱へて此に據ると。

明治三十五年、永吉某、資を抛ちて遊園を拓き、以て天下の士女を待ちしより、永吉遊園の名、之に代りて江湖に喧傳す。

盤迂園道を辿りて、歩を進むれば、級々たる園囿、芳草あり、佳樹あり、人をして坐るに攀縁の勞を忘れしむ、中腹、壘趾を存するもの、即ち是れ、文久役に於る東福寺城臺場なるものなり。

ともあります。明治の末から昭和の初めにかけては、確かに、東福寺城の名前より知られる田ノ浦公園が存在したようです。「永吉遊樂園」「永吉遊園」「田の浦遊園」「錦江園」などの呼称を持つ田ノ浦公園が、いったいどのくらいの広さに及んでいたのか確かではありませんが、「その西なる多賀神社の在る所も非常の好景にて、本園に譲らず」とあるので、多賀神社周辺は含んでいないようです。

「明治三十五年、永吉某、資を抛ちて遊園を拓き」との記述がありますが、現在「島津氏居城東福寺城跡」の石碑がある、多賀山公園の北側部分に、地元で「キツネ神社」とも呼ばれる廃社跡があり、そこに残る石台に、「永吉柳右衛門國治 明治三十一年八月起工」の文字を読むことができますので、明治三十一年には作られ始めたようです。その碑によれば、永吉柳右衛門國治は日清戦争

明治末に清水町田之浦にあった料理店の一つ
山海樓 明治四十三年（一九一〇）刊行の勝
野時太郎編『鹿児島市案内記』（吉田書房）
掲載の広告から。



時の陸海軍御用達の商いをしていた人物で、そこで築きあげた財で遊園を開いたようです。石台の上には、日清戦争時、威海衛で撃沈された清国の旗艦「定遠」号の砲弾を置き、そうした「見せ物」の感覚もあった遊園だったと思われます。今、その砲弾は、影も形ありません。

ところで、明治四十三年（一九一〇）勝野時太郎編『鹿児島市案内記』からは、多賀山の東側の田ノ浦に「風景樓」「山海樓」「三日月」という大きな料理屋が並んでいたことが分かります。多賀山への登り口に鹿児島市内有数の薩摩焼の慶田窯があり、「永吉遊樂園」もあって、大正時代の前後、多賀山・祇園之洲はちょっとした観光スポットになっていたようです。

大正四年（一九一五）に出版された『日本一周・中編』（博文館）で、日本全国汽車の旅を続ける小説家・田山花袋は鹿児島を訪れ、かつての文学仲間と再会し、郷里に戻り教師になっている旧友に鹿児島市を急ぎ足で案内してもらっています。その人物の名は書かれていませんが、もう一人鹿児島出身の文学仲間がいて、その人は沖永良部で村長をしている「土持君」とあります。民俗学の柳田国男とも親交のあった土持綱安のことで、沖永良部島の和泊村の村長だった人物です。
【二〇一六年一月追記】ここで名前が書かれていない友人は、『鹿児島県案内』や『尾花集』の著者・加藤雄吉（明治六年（一八七三）〜大正七年（一九一八））です。

鹿児島の新聞記者たちが田山花袋を歓迎する会を設けることになり、田山花袋は友達とともに、停車場の東北の方の「春日町だの清水町だのといふ町」のほうへ向かい、「稲荷川の岸」に「二軒も三軒も」並んでいる「薩摩焼の陶器を売る家」で、友達から無地の薄手のものをお土産にもらったあと、「松原の中にあるやうな瀟洒な酒樓」で新聞記者たちと飲むことになりました。どうやら田ノ浦の酒樓のどれかで飲んだようです。記念写真も撮ったとありますが、その写真もどこかに存在しているのかも知れません。酒の席で、国木田獨歩の友達だという記者が「美酒佳肴」はないが「櫻島の景色だけ」は「御馳走」になると言っています。また、磯の島津公の邸を紹介しようかという人物もあらわれるので、磯の仙巖園はまだ一般には公開されていなかったようです。

■陸軍省築城本部の管轄地

明治十七年（一八八四）九月十五日編成された『鹿児島県地誌』に、

陸軍省用地 砲墩、清水馬場町字祇園洲ニ在リ、面積四千八百弐拾四坪

陸軍省用地 清水馬場町字東福ヶ城ニ在リ、面積壹千五百五拾坪

陸軍省用地 砲墩、清水馬場町字風月亭ニ在リ、面積弐千四百八拾九坪

との記述があります。東福ヶ城（多賀山）には、陸軍が管轄する場所があったことが分かります（『鹿児島市史Ⅲ』「第一部 鹿児島県地誌・同備考（抄）」昭和四十六年）。西南戦争で本営になった場所でしょうか。城はもともとが軍事施設なので、戦前は、陸軍省築城本部が管轄していました。鶴丸城も大正十一年（一九二二）十一月に第七高等学校造士館の敷地として文部省の管轄になるまでは、陸軍省築城本部の管轄でした。

■山縣有朋の本営

西南戦争の城山攻防戦の時、多賀山は官軍側の陣地になっています。全国的に読まれた、川崎紫山（三郎）著『増訂西南戦史』（博文館、明治三十三年（一九〇〇））を引用します。

山縣參軍は、やまがたさんぐん 麓嶋城北、かごしまじやうほく 多賀山上の軍團本營に在り。たがさんじやうぐんだんほんえい 時に重圍已に合し、ときぢゆうゐすでがつ 進撃の機愈よ逼る。しんげききいよいせま 九月廿四日午前四時、ごぜん 山縣參軍出て、多賀山上より一望するに連哨の篝火、忽ち明かに、忽ち暗く、砲聲斷へんとして、又續き、落月一片、城山の傍に隱見し、四郊の光景、極目愁悽殆と言ふべからず。

この日、明治十年（一八七七）九月二十四日の城山決戦で、西郷隆盛は亡くなります。官軍の参軍（実質上の陸軍総司令官）山縣有朋中將が多賀山上の軍團本營にいたという事実は、現在の多賀山では気配も感じられません。

「補遺3」 東福山詩抄

新薩藩叢書に収録されたテキストには、新たな本文校訂が必要だと思われませんが、現状では、多くの文献の参照可能な唯一のテキストとなっています。ここでは、新薩藩叢書収録のものから、島津貴澄（元直）と向井友章（滄浪）の詩で、東福・庭・遊仙・別業など、東福之山Ⅱ多賀山とのかかわりを感じられる詩をいくつか選び、『林岳記』を読むための参考資料として掲載します。暫定的な書き下しですので、誤読も多いかと思いますが、あくまで叩き台として、ご参考まで。

試みに、赤字で、『林岳記』中に表れたことばと同じものをいくつかマーキングしてみました。島津貴澄と向井友章の詩で「仙」「隠逸」の主題では共通するものがあります。注目したいのは、島津貴澄の詩句「磴道」^{とうどう}「層巒」^{そうらん}という言葉や特殊な語句が『林岳記』と共通しているという点です。少なくとも『林岳記』の作者と島津貴澄は、同じ語彙の教養を持つ人物だと見なすことができます。

一 島津貴澄『廢簾詩稿』より

■春日別業 五言古詩

卜此幽眞境 買山宜養生 結宇翡翠壁 崎嶇俯荒城 推門望前圃 春至百花明
 深樹浸蹊密 芳艸繞階榮 醉吟憐獨往 平日絕逢迎 長倚松陰嘯 或向幽篁行
 徐窺種果地 不厭路崢嶸 鳥雀知吾靜 相和牖邊鳴 巖飈旭一起 翩飛數朶英
 青林隣古寺 寂寂送鐘聲 歸程下磴道 日夕有餘情

此を卜す幽と眞の境 山を買いて宜しく養生すべし
 宇を結び翡翠を壁とし 崎嶇^{きく}荒城を俯す 「崎嶇^{きく}Ⅱ山道のけわしさ」

門を推して前圃を望み 春に至りて百花明なり
 深樹蹊を浸して密なり 芳艸階に繞わり榮たり
 醉吟して憐む獨り往くを 平日逢迎を絶す 「逢迎」人を出迎え接待する
 長く倚つて松陰に嘯く 或は向いて幽篁に行く 「幽篁」奥深い竹藪（王維）
 徐に窺う種果の地 厭わず路の崢嶸たるを 「崢嶸」山道がめぐり谷が深い
 鳥雀吾が靜なるを知る 相和して牖邊に鳴く
 巖の颺に旭一たび起きて 翩って飛ぶ數朶の英 「朶」雲や花を数える単位
 青林古寺に隣し 寂寂として鐘聲を送る
 歸程に磴道を下り 日の夕に餘情有り 「磴道」石敷きの坂道

題に「別業」、詩句に『林岳記』に出る「磴道」とあることから選びました。野山や野鳥への親しみにも『林岳記』との共通性を感じられます。

■題高躍庭假嶠道山水 五言古詩

巴蜀寫眞狀 假山削成工 絶嶽地勢殊 奇景天造同 蒼池漲筵外 碧嶺赴窓中
 錦城隔樹遠 劍閣懸巖雄 水作千尋色 深林何鬱葱 鳥路開且斜 不關五丁切
 潛魚雖易得 終不見釣翁 灌木雖可伐 却無樵者通 不俯看幽谷 不仰望蒼穹
 勝遊歡豈少 宴樂賞離窮 常掃秦棧險 偏似待沛公

高躍庭の假嶠道山水に題す

巴蜀は眞狀を寫し 假山削りて工を成す 「巴蜀」巴州と蜀州、假山「築山」
 絶嶽地勢殊にして 奇景天と造りを同じうす
 蒼池漲って筵の外 碧嶺窓中に赴く
 錦城樹を隔てて遠く 劍閣巖雄に懸かる 「劍閣」大剣山と小剣山
 水作千尋の色 深林何ぞ鬱葱たる
 鳥路開き且つ斜にして 關せず五丁の切

潜魚得易しと雖も 終に釣翁を見ず

灌木伐るべしと雖も 却て樵者の通ること無し

俯せずして幽谷を看て 仰がずして蒼穹を望む

勝遊して豈に少なきを歡び 宴樂して離窮を賞す 「勝遊」風流な遊び

常に掃く秦棧の險しきを 偏えに似る沛公を待つに 「沛公」漢の劉邦

高躍庭という画家の山水に寄せた詩でしようか。高躍庭が何者か、またこの字が正しいのか調べがついていません。題に『林岳記』に登場する「燈道」という語句があるため選びました。山水画に合わせて庭を構想した可能性も考えられます。

■春日東福山別業迎鶴山公子 五言古詩

衡門避喧地 蓬蒿擁竹欄 平生愛佳友 偶此結芳蘭 三徑迎飛蓋 攀柳繫金鞍
寄邀南窓下 高談一何寬 鷄黍之筵席 豆粥唯爲餐 詩賦耽隱逸 主賓解衣冠
植杖憑曲檻 連杖上層巒 流光誠可惜 勝會數求難 若恆賞幽位 重問菊籬歡

春の日、東福山別業に鶴山公子を迎える

衡門喧地を避け 蓬蒿竹欄を擁す 「衡門」隠者の家、蓬蒿＝蓬蒿か？」

平生佳友を愛し 偶ま此に芳蘭を結ぶ

三徑飛蓋を迎え 柳を攀じりて金鞍を繫ぐ 「三徑」隠者の庭、飛蓋＝ほろつき車

寄りて邀ぶ南窓の下 高談して一たび何ぞ寛がん

鷄黍之筵席 豆粥唯餐と爲す 「鷄黍」もてなし 「論語」

詩賦して隱逸に耽り 主賓衣冠を解く

植杖曲檻に憑き 連杖層巒に上す 「層巒」連山

流光誠に惜しむべし 勝會の數求め難し 「勝會」盛大な会合

若し恆えば幽位を賞し 重ねて問う菊籬の歡 「籬」まがき

『林岳記』にある「層巒そうらん」という語句が使われています。

■ 秋日東莊 五言古詩

朝尋招隱境 曠野遠周旋 脂車策雲螭 造彼東園邊 薜荔繁松門 華亭高參天
 瀏瀏廻谿風 活活飛流泉 滿園晴宿雨 丹楓一何鮮 墜葉紛覆地 宛似錦繡筵
 疑遊仙洞裏 俯仰對山川 薄言乘高興 欲以試詩篇 縱目丘壑美 夷猶矚良田
 羈禽響曾阿 纖鱗躍深淵 寧待絲與竹 山水自朱絃

朝に招隱境しやういんを尋ね 曠野遠く周旋す 「招隱」隠者をたずねる」

車に脂して雲螭うを策ち 造るは彼の東園の邊 「螭」みずち」

薜荔松門に繁り 華亭參天して高し 「薜荔」かずら」

瀏瀏として谿風廻り 活活として流泉飛ぶ

滿園晴れ雨に宿して 丹楓一たび何ぞ鮮かなる

葉墜ち紛れて地を覆い 宛かも錦繡の筵に似る

遊仙の洞裏にあるを疑い 俯仰して山川と對す

薄言乗りて興高く 欲して以て詩篇を試みん

縱目す丘壑きゆうがくの美 夷猶いゆうして良田を矚しよくす 「縱目」存分に眺める、丘壑きゆうがく＝丘と谷、夷猶いゆう＝ためらう」

羈禽ききん曾阿に響き 纖鱗せんりん深淵に躍る 「羈禽」旅の鳥」

寧ろ待つ絲と竹 山水自から絃を朱くす

東福山別莊を「東莊」と表現した例だと思われるので選びました。

■ 秋日東福山別業忝迎尊駕見賜玉章賦此奉謝 五言排律

非學南陽隱 偶開東岸居 井桐飛葉後 籬菊發花初 門外廻金蓋 階前駐玉車
 因迎賢主轍 恰似武侯廬 山敞烟霞晚 園沾雨露餘 黃雲低碧海 素月上清虛

興熟題高調 恩深賜錦書 微才何用報 但耻之瓊琚

秋の日、東福山別業に忝くも尊駕をお迎えし、玉章を賜わる、此を奉謝して賦す

非學にして南陽の隱 偶ま開く東岸の居

井の桐飛葉して後にす 籬の菊發して花の初め

門外に金蓋廻り 階前に玉車駐す

因に迎える賢主の轍 恰も似る武侯の廬 「廬〓いおり」

山敞う烟霞の晩 園沾す雨露の餘

黄雲低くして碧海 素月上にして清虚

興熟して題高調 恩深して賜う錦書

微才何ぞ用いて報いん 但耻じる之瓊琚 「瓊〓たま、琚〓たまどめ」

東福山別業に藩主クラスの客を迎えたときの詩と思われます。やはり、かたい詩です。

夢 七言律詩

春眠不管太陽長 一臥牀頭別有郷 玉枕風輕隨蝶舞 梅花月滿憶仙郎

池塘艸入文人賦 臺上雲爲神女粧 何羨邯鄲尋蟻穴 呂翁昔日作侯王

春眠管^{つかさ}どらずして陽の長きを大にし 一臥牀頭に別して郷^{さと}を有つ

玉枕風輕くして蝶の舞いに隨い 梅花月滿ちて仙郎を憶う

池塘^{ちとう}艸入して文人の賦 臺上に雲して爲る神女の粧 「池塘〓池の堤（謝靈運・池塘生春草）」

何ぞ羨まん邯鄲の蟻穴尋ねしを 呂翁^{りよおう}昔日侯王に作る 「呂翁枕〓邯鄲之夢」

春の夢を主題にした詩です。神仙の夢との関連から選びました。

■東福山別業迎鶴山公子及諸君得侵韻 七言律詩

相迎騷侶此披襟 眺望煙霞春自深 城外家連津口出 雲根嶺帶雨痕陰
隱棲常抗江湖氣 沈醉共憐丘壑心 濁酒明朝君不厭 重飛華蓋訪山林

東福山別業に鶴山公子及諸君を迎え、侵韻を得る

騷侶を相迎え此に披襟し 煙霞を眺望し春自から深し 「披襟」打ち明ける

城外の家連なって津口に出て 雲根の嶺帶雨痕の陰

隱棲して常に抗す江湖の氣 沈醉して共に憐む丘壑の心 「丘壑」丘と谷。隱棲の場

濁酒して明朝君厭わじ 重飛して華蓋山林を訪ねる 「華蓋」はながさ

東福山別業で客を招いたとき詠んだ詩です。

■東福山別業和故人韻 七言絶句

莫謂蓬瀛不可求 避塵仙侶對丹丘 歸來若憶烟霞境 他日何妨此滯留

東福山別業にて故人の韻に和す

謂うなかれ蓬瀛求むべからずと 塵を避け仙侶丹丘に對す 「蓬瀛」仙人が住む蓬萊と瀛州
歸り來りて若し烟霞の境を憶えば 他日何ぞ妨げん此の滯留

亡くなったある人の詩を思い出しながら、東福山別業で詠んだ詩です。

二 向井友章『滄浪詩集』より

■團扇歌奉謝豫章公子 七言古詩

團團明月夢徘徊 驚起牀頭双扇開 不知此物自何至 大梁公子千里賜

竹幹製成碧琅玕 裝紙皎潔勝齋紈 長夏炎炎火宅裡 一揮滿堂忽生寒
 非啻睡魔自退遁 可憎蒼蠅飛去遠 執之清談對佳賓 風流何讓塵尾新
 豈意仁風慰民後 旁及棄損搖落人

團扇歌 豫章公子に奉謝す

團團明月にして夢徘徊す 驚起して牀頭に双扇開く 「團團〓まるいさま（班婕妤・団団似名月）」
 知らず此物何より至るか 大梁公子千里の賜なり 「大梁〓魏の首都」
 竹幹を製して成る碧の琅玕 裝紙皎潔にして齋の紈に勝る 「齋紈〓ときのしろぎぬ」
 長夏炎炎として火宅の裡 一揮するに滿堂忽ちにして生寒し
 啻睡魔^た自から退遁するのみに非ず 憎む可き蒼蠅も飛び去って遠し
 之を執りて清談し佳賓と對す 風流何れか讓る塵尾の新たなる
 豈に意^{おも}う仁風民後を慰むと 旁く棄損に及んで人を搖落す

向井友章と豫章公子こと島津貴澄の關係を示す詩のひとつです。暑い夏だったので
 しょう、貴澄から友章に、きりりとした団扇が贈られて、友章がそれを感謝した詩です。
 淀みなく返礼の詩を書き上げたような印象を受けます。この書きっぷりからみるに、や
 はり向井は才子だったのでしょう。同時に、冒頭の「團團明月夢徘徊」など、「まるま
 ると明月の夢かけめぐる」とでも訳せそうな、江戸時代的な俳諧味もあるような気もし
 ます。こういう詩が「謝礼」として人と人の間を行き交っていた時代があったわけです。
 現在では「謝礼」としての詩の価値は暴落してしまいました。

陪栢梁君遊東福山鶴鳴亦從 五言律詩

欲作平原飲 歡遊東福城 雲迎飛蓋起 鳥雜和鸞鳴
 霜落山風冷 鴻連海色明 詩才誰最健 客有長鄉名

栢梁君に陪して東福山に遊ぶ、鶴鳴も亦從う

欲して作す平原の飲 歡して遊す東福の城
 雲迎して飛蓋^{ひがい}起ち 鳥雜して和す鸞^{らん}の鳴くに
 霜落ち山風冷たく 鴻連^{わん}なつて海色明かし
 詩才誰が最も健たる 客有り郷名を長ず

栢梁君は島津貴澄のあとを継いだ、垂水島津家第十一代、島津貴品です。

【二〇一六年一月追記】読者の方より、詩題にある「鶴鳴」は、儒学者の市川鶴鳴〔元文五年（一七四〇）〜寛政七年（一七九五）のことではないかというご指摘をうけました。市川鶴鳴は荻生徂徠〔寛文六年（一六六六）〜享保十三年（一七二八）〕の系統に連なる儒学者で、高崎藩（現・群馬県高崎市）出身の人。松平定信が出した朱子学専一とする寛政異学の禁〔寛政二年（一七九〇）〕に反対し、「寛政の五鬼」と呼ばれた儒学者のひとりとして知られています。島津貴澄は、安永五年（一七七六）垂水に邑校・文行館を設立して、その指導者として市川鶴鳴を招いています。少なくとも三年は鹿児島に滞在していたようです。この詩が書かれた時期も市川鶴鳴が滞在した一七八〇年前後と推測されます。

移居深山 五言律詩二首

辞祿在人境 猶爲請謁妨 一逃丘壑靜 終絕市朝忙
 花發看春及 醉醒知日長 放歌時鼓腹 自謂勝羲皇

老病耽閑臥 深山結草堂 情兼双闕遠 夢遶數峰長
 虎豹嘯庭砌 風雲出棟梁 微醺無所事 採藥上高岡

祿を辞して人境に在り 猶ほ爲す請謁^{せいえつ}の妨を 「請謁^{せいえつ}＝貴人に面会を請う」
 一たび丘壑^{きゅうがく}の靜に逃れて 終に市の朝忙を絶す 「丘壑^{きゅうがく}＝丘と谷。隠棲に適した場所」
 花發して春の及ぶを見る 醉醒めて日の長きを知る

放歌して時に鼓腹す 自から謂う義皇に勝らんと 「義皇」伏義。古代中国の伝説の天子」

老病にして閑臥に耽り 深山に草堂を結ぶ
情は双闕を兼ねて遠く 夢は數峰を遶りて長し 「双闕」宮殿外の一対の望楼」
虎豹庭の砌に嗥え 風雲棟梁に出ずる
微醺して事える所無く 採藥して高岡に上る

向井友章が、深山に草堂を結ぶことを詠った詩で、『林岳記』の作者「友章」説の材料にもなるかも知れません。

■陪栢梁公子遊東福山 七言律詩

翩翩公子謝安心 時向東山別業尋 招隱衡門停白馬 忘榮薛幄挂華簪
欄前潮水南天湧 屋後雲烟北嶺深 歌舞何須絲與竹 松風日落起清音

栢梁公子に陪し東福山に遊ぶ

翩翩公子謝して心を安んじ 時に向東山別業を尋ねる 「翩翩」ひらひら（白居易・翩翩雄与雌）
招隱衡門白馬を停す 榮を忘れて薛の幄華簪を挂ける 「招隱」隱者をたずねる、衡門「隱者の家」
欄前の潮水南天に湧き 屋後の雲烟北嶺に深し
歌舞何ぞ須らく絲と竹のみとすべきか 松風日落ちて起きる清音

向井友章が、栢梁公子こと島津貴品のお供をして、東福山に遊んだときの詩です。

■初春聞豫章公子信宿東福別莊 七言律詩

聞道幽情愛艷陽 行厨小隊宿東莊 尋花胡蝶春眠靜 帶月梅林夜燕香
湖濶冥鴻懷范蠡 山深啼鳥思劉郎 何當病起趨陪日 更奏遊仙曲一章

初春に聞く、豫章公子の東福別荘に信宿するを「信宿〓二泊する」

道聞幽情ありて艷陽を愛し 行厨小隊東荘に宿す 「艷陽〓晩春、行厨〓旅の弁当箱」

花を尋ね胡蝶春眠靜かにして 月帯びて梅林夜燕香る

湖濶くして冥鴻范蠡を懷しみ 山深くして啼鳥劉郎を思ふ

「冥鴻〓俗世を避ける志ある人（李賀）、范蠡〓春秋時代、越の功臣」

何ぞ當に病起きても陪する日に趨くべけんや 更に奏す遊仙曲一章

題の「東福別荘」を、詩の中で「東荘」と表現しています。

■東福城席上示上客鶴鳴 七言絶句

公子翩翩幾個多 孟嘗門下此相過 携來自有行厨美 醉後誰爲長鋏歌

東福城席上 上客鶴鳴に示す

公子翩翩幾個多し 孟嘗門下此に相過ぐ 「孟嘗〓戦国時代の孟嘗君」

携え來たつて自から有り行厨の美 酔いて後誰ぞ爲さん長鋏歌

「長鋏〓長いはさみ、戦国時代の毛遂の故事。自称大人物」

東福山で行われた宴の席のときの詩です。

【二〇一六年一月追記】初稿では詩題を「上客に鶴の鳴くを示す」と読んでいましたが、「上客鶴鳴に示す」に訂正しました。ここでの「鶴鳴」は儒学者・市川鶴鳴のことと考えた方が妥当です。「鶴鳴」ということばも詩的なことばですので、詩句の「翩翩」と響き合ってもいます。徂徠学派の市川鶴鳴の存在は、その後の文化崩壊事件との関連で見返すと、興味深いものがあります。一八〇〇年前後の鹿児島のカリブの文化的見取り図のなかで、まだ深く掘り起こされていない鉅脈のひとつなのかもしれません。

花満名園二月春 開筵置酒引騷人 醉來相和高歌調 風起翩翩白雪新

春の日、山口町田二助教と同じうして、東福別荘に遊ぶ

花満つる名園二月の春 筵を開き酒を置き騷人^{そうじん}を引く 「騷人^{そうじん}」詩人・文人
酔い來たつて相和して歌の調べ高く 風起つ翩翩として白雪新たなり

山口・町田ら助教と同行して東福別荘に遊んだときの詩です。

《 ENVOI 》

- 01 東郷さんの姿の向こうに漱石の庭を見とおす歴史的想像力を身につける。
- 02 2003年に、多賀山で『林岳記』200周年を祝わなかったことを後悔する。
- 03 2007年は、島津貴澄の没後200年でした。
- 04 2012年、今年は、末川周山編『浪の下草』200周年、そして向井友章没後200周年です。

2012年10月16日



平 田 芳 樹

©HIRATA YOSHIKI 2012